教会会報
川畔の尖塔
日本キリスト教団札幌教会

「わたしに会うことになる」
マタイによる福音書二八章一節～一〇節

牧師　米倉　美佐男

「あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。」（六節）

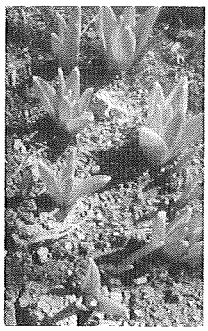
主のご復活を心からお祝いいたします。

「主は十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり」、毎週主の日の礼拝で共に使徒信条を告白します。主イエスは生前幾度となく十字架と復活のことをお語りになられました。けれども弟子たちは誰一人真剣に耳を傾けることなく信じなかったのです。彼らはそんな話は聞きたくありませんと拒絶しました。女性たちは違います。十字架の場面でも彼女たちは逃げませんでした。復活の墓も一番目の目撃者はマグダラのマリアです。墓は閉じられ、石が置かれ、封印されていました。この墓で起こった出来事が大きく世界を変えたのです。

「さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。」（一節）。その時、大きな地震が起こり、墓の石はわきへ転がりその上に主の天使が天から下って座っていました。その姿は神々しく番兵たちは恐れで震えあがりました。生きた心地がしなかったのです。そうです、福音を正しく聞く者にとっては素晴らしい出来事が、受け止めることのできない者にとっては大いなる不安になるのです。それが「週の初めの日」即ち復活の日曜日でした。天使が婦人たちに言います。**「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。」（五～六節）**。主イエスご自身が預言されたことがその通りになったのです。墓は空です。主は復活され、ガリラヤで再びお目にかかれることが告げられました。婦人たちは復活の主に一足早くお会いしました。

マタイは興味深い記録を残します。復活の出来事をユダヤ当局が隠蔽しようとした事実です。出来事を目撃した番兵たちに祭司長、長老たちは口止めに多額の金を与え、弟子たちがイエスの遺体を盗んだと言う偽証をさせたのです。その話は当時のユダヤ人の間に広まっていたのです。

ガリラヤへ行けと主が言われたのは散らされた神の民の再結集のためでした。先の四章一四～一六節のイザヤの預言で異邦人のガリラヤ、暗闇に住む民は大きな光を見、希望のメシアに出会うという預言が成就するためでした。主の復活の恵みはユダヤ人だけの特権ではなく、復活の主を受け入れるならばだれにも開かれている。主イエスを真のメシアと信じるならばみな新しい神の民、新しいイスラエル、新しい選民なのですから。



芽吹いてきた
ヒヤシンス
（３月末撮影）

イースターを祝って

イースター

中村佳世子

今年もイースターが巡ってきました。四ヶ月前に祝ったクリスマス、六月のペンテコステ（聖霊降臨日）と共にキリスト教の三大祝日です。

クリスマスといえばまず思い浮かぶのは〝聖夜〟でしょうか。

一瞬天が開かれ、羊飼いたちに天の喜びが顕わされたものの、あとは羊たちの鳴く静かな闇。神の独り子が人となって降り給う最高の贈り物。密やかに、ごく僅かな人びとがその降誕を祝い、大いなる恵みを分かち合った。

これに比べイースターの喜びは一大衝撃の中に湧き上がった。「主は甦えられた！」絶望と恐れの中、知らせを聞いた弟子たちの喜びはどんなであったか。知らせを告げに走り続けた人々の荒い息づかい、広がる興奮の輪。四福音書はそれぞれ僅か一～二章をこれにあて、簡潔にことの次第を伝えている。

四人の記者が少しずつ違う出来事を取りあげており、読み返すたび心ひかれる箇所が違ってくる。

この度はヨハネ福音書二十一章十二節、ガリラヤ湖の海辺に立たれた復活の主は、炭火をおこし魚を焼き「『さあ、来て朝の食事をしなさい』と言われた。弟子たちはだれも、『あなたはどなたですか』と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。」いいたいことは山ほどあるが言葉にならない。無残な死をとげられた愛する主が本当に今、目の前で共に食事をしておられる。この瞬間をヨハネは私たちに書き残した。

讃美歌21―306に深い罪の告白と悔い改めの歌がある。この曲のメロディにのせ、イースターには勝手ながらこう歌いたい。

あなたもそこにいたのか
主が魚をわたされた時
ああ、いま思い出すと
熱い熱い（　　）に
わたしはふるえてくる

（　）には何と入れたら良いだろうか。

〝涙〟　〝感謝〟　〝喜び〟

死より復活された初穂としての主の御姿、この恵みを信ずるすべての者に与えて下さるという。

静かなガリラヤ湖畔、質素な朝食、打ち寄せる波の音――贖いのわざは成し遂げられた。主は勝利された――

ハレルヤ！　主よ感謝します。

イースターに思う

加藤　愛子

クリスチャンホームに育ち、中学から大学までの十年を北星学園で過ごしました。

北星女子中等部に入学したのが、北星学園八十周年の年でした。それから半世紀の今年、北星学園は百三十周年を迎えます。

私は一九七七年四月のイースターに、金井輝夫先生より受洗しました。丁度、大学を卒業し、新しい社会生活が始まる時でした。青年会や聖歌隊で一緒だった石川律子

さんと、妹の林信子と三人で受洗しました。

その頃の青年会は、多い時は二十人以上いて、ワイワイ楽しかった事や、大人会や婦人会の方々との聖書研究会や証しの会などがあり、有意義な時間を過ごしました。

それから四十年。就職、結婚、子育て、介護と、あっという間に月日は流れましたが、いつも神様の愛に包まれていた事に感謝いたします。

祖父、黄金井解三が札幌農学校時代に受洗し、この会堂建築の時に役員としていたこともあり、この教会に連なることが出来て嬉しく思います。

札幌の歴史と共に歩んできた札幌教会。沢山の困難や試練を乗り越えて来たことと思います。そして今、私達もこの試練の時を、お互いを愛し、許しと交わりを持って臨まなければならないと思います。

礼拝堂の正面上に掲げられている「神是愛」を見上げ、神は愛なりと唱えつつ、今の私達に一番欠けているものなのではと思うのは、私だけでしょうか。しかし神様のなさる事には時があります。

その時を祈りながら待ちたいと思います。イースターおめでとうございます。

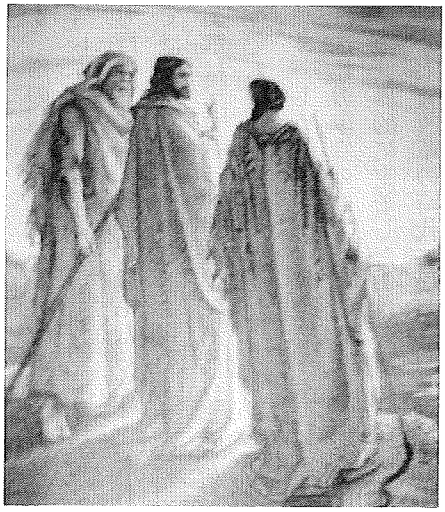
懐かしい思い出と新たな思い

山田喜代江

イースターの季節になるといつも思い出すのは、今から六十年程前の小樽教会での受難週の早天祈祷会です。

まだ薄暗く寒い朝五時頃に、皆徒歩で教会に集められ、奨励や証しを伺い共に祈り、イースターまでの毎日続けられました。

寒さ厳しい外から、牧師がストーブを焚いて暖めて待って下さっている教会に入った時には心身共に温かく、神様のお招きを実感致しました。



図説バイブル（ギュスターブ・ドレ）

その後、豊かなお恵みのうちに、それぞれ職場や学校や家庭へと派遣され、イースターまでの良き備えの時でした。

今から考えますと、これが私の信仰生活の原点であったように思います。

以前もこの話を書かせて頂いた気も致しますが、記憶もあやしいこの頃です。

主人を主のみ許に送りましてから、一年余り…。やはり気持ちの張りが無くなったためでしょうか、昨年末から体調不良が続き、教会も休みがちになってしまいました。

そこでこの度、思い切って娘の自宅近くの高齢者住宅に引っ越しました。

五十年程住み慣れた地を離れるのは、永年のご近所の方々とのお交わりもあり寂しい思いも致しましたが、今は何より見守りのうちに安心して生活する事が許され、心より感謝です。

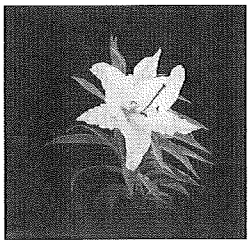
イースターを迎えるにあたり、この年齢になって気持ちも生活も新しくされた喜びを持って、神様のご計画に添うように日々を過ごして参りたいと思います。

レントの過ごし方

牧師　米倉美佐男

今年のレントは三月一日の灰の水曜日から始まりました。四月十六日がイースターです。レントの時は祈りに集中する期間です。キリストの苦しみを共有するために贅沢な食事（特に肉や乳製品）を避け、制限するのです。信仰の事柄を外見でしばるのでなく、本質からにじみ出てくる謙遜さ、主に仕えるという姿勢で献げるのです。人でなく、父なる神に見ていただくために、主イエスに喜んで頂くための奉仕を献げていきましょう。レントについて、過ごし方を書くようにとの依頼があり、今回、改めて書いてみました。

レントは日本語では受難節です。四旬節、大斎節、四旬祭と呼ぶ教会もあります。イースター（三月二十二日～四月二十五日）前の日曜日を除いた四十日間の期間です。イースターの六週間前の日曜日の前の水曜日（二月四日～三月十日）から始まります。その日が灰の水曜日です。灰は聖書的には死を意味し、懺悔や悲しみの象徴です。レントの過ごし方の特徴は今は殆ど見ませんが、断食と祈りの時、悔い改めの時です。悔い改めが先で断食となります。この四十日間はハレルヤもグロリア・パトリも歌いません。原則的には結婚式も行いません。教会の鐘もならさず、礼拝ではオルガン、伴奏楽器を用いません。讃美歌はアカペラ。聖壇に花も飾りません。今でも厳格にそのようにする教会もあります。しかしそれより大切なのはこの期間は洗礼の準備期間であることです。レントが全世界的に定着したのは八世紀で十六世紀の宗教改革の時代に検討され整理され現在に至っています。最後の六週目は受難週（パッション・ウィーク）です。第六主日はパルマルム（棕櫚の主日）と呼ばれて主がロバの子に乗りエルサレムに入城されたことを覚えます。この時から十字架にお架かりになる一日一日、そして復活のイースターまで悔い改めの時として厳かに過ごします。主の十字架を仰ぎつつ、主の受難が我が罪の赦しのためであったことを覚えて過ごしましょう。



洗足木曜日礼拝の今、昔

鈴木　紀子

毎年受難週の木曜日の夕、札幌教会は洗足木曜日聖餐式を行います。夜の静けさに包まれた礼拝堂で、この場に集う一人一人は講壇の前の「恵みの座」に進み出て、牧師から直接、パンと葡萄酒をいただく聖餐式に与ります。主の受難を思い、ヨハネ十三章、主イエスの愛する弟子たちへの洗足の教訓が深く心に響く大切な時です。

古い週報の綴りに「聖木曜日聖餐式」の予告として「十字架の前夜、弟子たちの足を洗い、彼らと共に最後の晩餐をとり給うた主を記念して行います。聖餐式の源ともいうべき主要な夜でありますから、万障繰り合わせておいでください」（一九六六年四月三日号）とありました。粟津音松先生の呼びかけです。

「洗足木曜日聖餐式」の名称は、一九六七年金井輝夫先生が牧会されてからで、それ以前は、「聖木曜日聖餐式」「受難週聖餐式」等と言われていたようです。一九九五年から聖歌隊の奉唱が加わり、現在の式次第となりました。

教会懇談会報告

宣教委員会

二月二十六日礼拝後に開催された教会懇談会は、五十四名の参加を得て明星館二階ホールで開催されました。今回は事前に「これからの札幌教会を考える」をテーマとし、ご意見を提出して頂きました。多数の意見が寄せられましたが、大きく二つの課題に集約されました。第一の課題は長年にわたる教区との対立関係の解消とそれに伴う教会内にある〝しこり〟の解消です。第二の課題は教会員の高齢化が進むことによる教会財政の規模縮小に伴う課題です。

第一の課題については担当役員から教区との交渉過程について解決への道筋が見えつつあることが説明されました。五月に行われる教区総会における教区議長総括が注目され、またそれに対する総会議員の反応が注目されます。しかしこの課題はこれで終わるものではなく、札幌教会内部に大きな課題が残ります。いずれもこの課題の最終解決に向けて真摯に取り組み、祈りつつ御心に叶う解決を求めたいと願います。

第二の課題は高齢化対応の財務問題ですが、当日配布された資料により明らかなように、教会財政の献金規模は年々縮小しつつあり、その対応については教会員全員で考える大きな課題となっています。毎年繰り返される教会行事の費用削減の努力も必要ですが、縮小均衡だけが解決策ではなく、次世代の人々への伝道活動と、教会員の信仰の継承の努力が必要です。勿論宣教委員会による伝道活動の組織的展開は更なる発展が求められますが、教会員による自発的伝道活動や教友活動の積み上げが求められます。

教会の様々な問題点の解決は勿論、牧師を中心として各役員の努力も必要ですが、それは一人一人の教会員の支えがあってこそ成り立つものであります。

その為には今後とも、教会内の意思疎通をよりスムーズに行うことを工夫し、課題を共有して、共に考え祈ることが出来るよう努めたいと思います。

受洗おめでとう！

受洗に至るまでと想い

齋藤　孝子

原稿をお願いされて、はぁーッ…困った…そのまま書けばいいのだ…という結論に至りました。

まず始めに、私の学生時代は毎朝の礼拝から始まりました。このことが私の根本的な土台となっています。当時、お説教を聴いていても内容はさっぱりわかりませんでしたが、年を重ねて行くうちにイエス様がおっしゃっていた言葉の意味が少しずつ理解できるようになってきました。子どもが独立して仕事も一段落してからは、いっそうイエス様が身近に感じられるようになり「以前から気になっていたあの石造りの教会に行ってみよう」と突然いきなり中に入ってみると、北星学園の先輩の方達が笑顔で迎えてくださったのです。

その二年後に病と出会い失意の底で「すべておまかせします」とお祈りしたその瞬間に〝魂がまるごと〟スーッと空中に浮いて軽くなった体験をしました。

えっ？なに？これって…イエス様？ですよね…このことが私の受洗のきっかけとなりました。

次の日からは重荷が無くなり平安が訪れ、治療の効果もあり、良い結果となりました。

皆様に祝福して頂き、とてもとても〝魂まるごと〟静かで穏やかに、人生のゴールデンタイムを現在過ごしています。

皆様、これからもご指導のほどよろしくおねがいいたしますね。感謝。

※田中萌葵さんの原稿は次回に掲載予定です。

紀行文

「塩狩峠」号で小説体験

八木橋貞美

昨年九月、日帰りバスツアー「塩狩峠号で行く小説体験の旅」フットパス塩狩峠の道を歩く、というイベントに参加した。

フットパスはイギリスが発祥の地とされ、森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からある、ありのままの風景を楽しみながら歩く小径のことで、三浦綾子の小説発刊五十年を記念して三つの道（塩狩峠、氷点、泥流地帯）が設定され、その第一弾として和寒町の「塩狩峠（天塩の国と石狩の国の国境にある峠で難所）の道」を同行の鈴木恵子さんと歩いた。私たちは貸し切りバスで旭川駅に向かった後、特別臨時列車「塩狩峠号」（二両編成）に乗車し、緩やかに流れる風景を見ながらＪＲ塩狩駅（現在廃駅）に到着。駅には萩の花がこぼれるように咲き乱れ趣を添えていた。

この駅がある南丘森林公園には、三浦綾子の旧宅が再現保存されており、資料の展示、フットパスと共に「塩狩峠」の朗読会が催されていた。（先ごろ上映されていた「母」のロケ地はこの三浦綾子の旧宅である）

フットパスは全長８・６キロのコースだが、当日の手違いで札幌組四十名は、ハーフコースとなったが、秋の一日好天に恵まれて「長野政雄受難の地」を歩きながら、「人の魂はどのようにして動くのだろう」という作家佐藤優の言葉と共に、プロテスタントの信仰は、決断の前に日々の行為があることを、三浦綾子は小説「塩狩峠」を通し、私達に教えていたのではないかと思った。

今年は「三浦文学の道」第二弾五月「泥流地帯の道」六月「氷点の道」が開催予定で、今年も参加したいと思っている。

大人会・婦人会新年会

大人会　佐々木三郎

今年度の大人会の目標の一つにメンバーの拡充をあげ、その成果で新年会には十七名が出席。お弁当を頂きつつ新メンバーの紹介と、ひとりひとりの信仰についての思いを語り合いました。その中で心に残った方々のお話を紹介します。

堀田茂兄は仙台で受洗され札幌へ来られたとのこと。出席者の中に仙台で生活されていた方が五人もいたことが判り、禁教時代、仙台での殉教者たちの話で盛り上がりました。

求道者の黒瀬文平氏は「北大卒業後、岡山で生活し、再び札幌へ戻り、老後の生き方について考え教会を訪れた」とのこと。また佐藤國彦兄は「父親は仕事帰りに教会の前を通り、クリスマスに強引に誘われ、それがきっかけで熱心なキリスト者となり、その時誘ってくれた方々と生涯信仰の交わりをもち続けた」と話されました。

他にも色々なお話があり、有意義な良き交わりの時を過ごしました。

婦人会　深田三枝子

一月十五日の主日礼拝の後、風もなく静かな冬空のもと、三々五々教会から近くのホテルへと向かいました。

用意されたプログラムに添って讃美歌四八二番を賛美し、マルコによる福音書六章一～六節を学んだ後、調えられた昼食を今年も参加者が一緒に戴くことができました。

笑顔と会話がはずみ、短いひと時でしたが、婦人会として年の始めの大きな糧を得たような気持ちになりました。

当日は新入会員・齋藤孝子姉、転入会員中平敏子姉、特別参加者など五一名の参加がありました。

与えられた恵みに感謝の気持ちで応えられますように。

東日本大震災支援セール

伊藤美智子

二月十九日、婦人会例会（説教・榮潤子牧師）後、婦人会の主催で行われました。あの強烈な恐怖の日から早、六年が過ぎようとしております。

どうしても薄れがちになってしまう記憶は年二回の震災セールを行う事でよみがえり、まだまだ復興されていない状況の下、本当に微力ながら、支援させて頂ける事は、感謝です。

私共がいつ、その逆もあり得る事を思う時、震えが止まりません。

今回で十一回目の支援セールは、昼食を手作りカレーライスにし、手芸品、アクセサリー、食器、手作り菓子、惣菜、炊き込みごはん、のり巻など、多種目の献品が寄せられ、八九、三四八円という収益を得る事が出来ました。感謝です。

それにしても、わが教会婦人会の団結力と体力は、いつもながら素晴らしく、誇りに思います。

思いを共に、良い働きが出来ました事、嬉しく幸いでした。

教会Do！

家庭集会の意義（2）

宣教委員会

本稿は札幌教会の創立時に遡って家庭集会の歴史をみることにしている。そのさい受洗以来、生涯の殆どを札幌教会（札幌美以教会）で信仰生活を献げた佐藤昌介にスポットを当てている。佐藤昌介ら札幌農学校一期生の受洗は、W・S・クラークとの「全人的邂逅」[注1]なしには説明し得ないであろう。

佐藤ら一期生十一名は、東京で札幌農学校入学を許可（口頭試問の選抜の後）され、一八七六年七月、品川で玄武丸に乗船し北海道小樽に向かった。船中で一部の学生が高歌放吟し乗客の顰蹙を買った。玄武丸には北海道開拓使長官の黒田清隆や札幌農学校教頭に任ぜられたW・S・クラークらが同僚教師らとともに乗船していた。一部学生の振る舞いに、黒田はなんらかの徳育教育の必要を痛感しクラークと相談を重ねた。クラークは、札幌農学校教育のなかに聖書を採り入れることを黒田に提案した。黒田は「個人的には異議はないけれど、法律と政府高官の意見があるので聖書使用は禁止せざるを得ない」と答えた。[注2]

その後、同校開校式を間近に控えた一八七六年八月七日～十一日、クラークは黒田長官に同行し小さな蒸気船で石狩川を遡上し空知視察を行った。そのさい、黒田は「（クラークが）聖書の含む真理を学生に教えるのは構わないが、聖書をみんなの前で読んだり、個人的使用のために学生に配ったりするのは困る」と言った。[注3]クラークにとってこれは受け容れられなかった。

同年九月と思われるが、黒田は改めてクラークに「学生によい道徳教育を施してもらいたい」と要請した。クラークは「（自分は）聖書に絶えず言及せずに道徳を教えることは出来ない。だから道徳を教えると、あなたを怒らせるようなことになるのではないかと恐れる」と答えた。翌日、黒田はクラークに「聖書の使用禁止は撤回する。クラークの思うようにやってよろしい」と伝えた。これまでの経緯から、黒田はクラークにキリスト教による道徳教育を「黙認」したのである。

家庭集会　髙杉純二兄・久美子姉宅
（2017. 2. 9）

注1　大山綱夫『札幌農学校とキリスト教』EDITEX　二〇一二年七月、25頁
注2　札幌教会『札幌教会百年の歩み』一九九二年七月、61頁
注3　札幌教会・前掲書、61頁

追悼のお知らせ

大橋良尚兄が、三月十六日逝去されました。編集の都合に依り、今回記事を掲載できなかったことをお詫び致します。

編集後記

残雪を渡ってくる風は冷たくとも、喜びと希望の芽吹く、春の匂いを運んできます。私たちも希望の光、復活の主と共に、祈りつつ歩み続けられますように！
イースター号発行に感謝。　梅田和代